

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 299

## 戦場で気が狂っていくということ - 映画『地獄の黙示録』

映画『地獄の黙示録』は撮影に関して国防総省の協力が得られなかったことを、評論家の立花隆が『毎日新聞』(02.2.5)の中で記している。《アメリカで戦争映画を作るときは、だいたい国防総省に協力を求め、飛行機であろうと、戦車であろうと、何でも使わせてもらうのが常である。しかし、「地獄の黙示録」の場合は、国防総省が、反軍部的内容の映画になるらしいとにらんで、全く協力しなかった。》そこでコッポラはオーストラリア軍の協力を得ようとして、オーストラリア政府の許可をとるが、オーストラリア軍部に対する米軍部の圧力によるものが、途中からオーストラリア政府が非協力的になったので、フィリピンをロケ地を選ぶ。だが、《フィリピン軍の所有するヘリコプターは機数も少なく、機種も不ぞろいで、おまけにしょっちゅう反政府ゲリラの討伐に予告なしに出かけてしまうので、撮影には大変苦労し》、フィリピンに駐屯する米軍の力を得ようとしたが、《米軍は一貫して協力を拒否した》。

コッポラは米軍の協力を得るために、ラムズフェルド国防長官(註 - 30年後の現在も同姓同職であるが、同一人物とは考えられないので、ブッシュと同様に親子なのか?)に次の長文の電報を送った。

「この映画は反軍的(anti-military)なものではありません。この映画は反米(anti-U.S.)なものではありません。この映画は親米(pro-U.S.)なものです。この映画は人間主義的(pro-human)な立場に立っています。この映画は、この戦争(ベトナム戦争)に関して、私が最も重要かつ最も真実であると信ずる見解で描こうとするものです」

この電文について、立花隆はこう言及する。《実に注意深く言葉を選んで、なんとか軍の協力を得たいという気持ちを強くにじませながら、軍の協力を得るためなら、こちら軍に全面協力というような卑屈な態度はとっていない。 - アメリカという国家に対しては、antiではなく、proであるとはっきりいうが、軍部に対しては、anti-militaryではないというものの、pro-militaryであるとは絶対にいわない。そして、humanに対してはproであると断言するが、戦争に対しては、言及を避け、antiともproとも一言もいわない。もし、戦争に言及したら、そして、ウソをつきたくなかったら、antiといわざるを得ないからである。この映画は戦争の最も本質的な部分がどこにあるかを哲学的に探求していき、そこにノーを突きつけることが主題になっている(コッポラはさまざまな表現でそれをはっきり言明している)からである。》

つまり、コッポラが電文で主張していることは、殺すか殺されるかという戦争の極限的な状況に立たされたときの人間を、反戦争的でも親戦争的でもない「人間主義的(pro-human)な立場」で描写しようとする、「私が最も重要かつ最も真実であると信ず

る見解」に立つなら、「反軍的」であることも「反米」であることも超越してしまうということだ。もう少し言葉を費やしてみる。戦争それ自体は「人間主義的」であって、反「人間主義的」ではけっしてありえない。「人間主義的」だからこそ戦争は行われるのであり、実に「人間主義的」に戦争は粛々と押し進められる。国家を必要とせざるをえない「人間主義的」な立場にとって、戦争もまた不可欠となっている。であれば、非日常的な戦争の極限状況で「人間主義的」な立場というものが、どのように狂わされていくかというよりも、どのように先鋭化されていくか、という観点に立つほうがより一層「人間主義的」にちがいない。

「人間主義的」な立場にとって戦争は相容れないと考えるかぎり、国家（集団）組織としての人間が行う戦争は一向に見えてこないだろう。戦争など存在しない通常の生活を過ごしてきた平凡な男が徴用されていきなり軍隊に放り込まれ、ある日殺すか殺されるかの前線に送られていったとき、彼はその戦場のなかで戦争など知らずに育ってきた自分のかつての生活がどのようにもたげてくるのか、それともそんなかつての生活とは切断された戦闘モードに入っている別人がそこに見出されることになるのか、そうしたことは人さまざまであるのか、もし人さまざまであるとするなら、その差異はどのようなかたちで発揮されていくのかなど、戦争と交差して生起するすべての問いを掬い取っていかなければ、戦場の中に身を置く人間が浮かび上がってくることはない。

《戦争の本質は人を殺すことである。戦争で勝つために、最も重要なことは人を殺すことをためらわないことである。カーツ大佐の一見特異な性格は、この本質をつきつめて行動するところからきている。》と、立花隆は続けて書く。「人を殺すことをためらわなくするためには、殺戮に正義とか善の理念を被せて、そこに意味を見出すという方法がまず考えられる。相手は非正義な立場だから、正義のために殺されても仕方がないという論法だ。だから戦争がいくら無意味であろうとも、聖戦や正義を唱えて相手を殺すことを正当化する。しかし、ここで看過してはならないのは、正義のために人を殺すということは、人を殺すことよりも正義が上回っていることが前提とされている。はたして正義は人を殺すこと以上の価値があるか。人を殺すことに勝る正義とはどのような正義であり、正義とは本来殺したくなるほどの相手にも行使されなくてはならないものではないのか、という疑問が当然湧き上がってくる。

正義のために人を殺すことが正当化されるならば、殺される側にとっての正義は一体どうなるのか、という疑問も引き出される。少なくとも人を殺すというそのことにおいて、そこでの正義が厳しく審問されており、人を殺すことを正当化するために正義の理念が持ちだされているにすぎないことが明白となってくる。正義を唱える側にも、そんな正義が嘘っぱちであることを見抜いている者は少なくはない。カーツ大佐もその一人である。だが人を殺すための正義が嘘っぱちであるなら、人を殺すことに当然ためらいが生じてくる。ためらいが生じてくると、自分の身が危なくなってくる。では、どうすればよいのか。嘘と知りつつ、その正義を信じようとするのだ。たぶん多くの者がそうしているにちがいない。しかし、戦争の嘘にうんざりしているカーツは嘘に頼るどこ

るか、戦争の嘘を憎悪しつづける。嘘で塗り固めなければ戦争を行使できないのか、というのが彼の主張である。

いくつもの戦場を渡り歩いてきたカーツが思い知らされてきたのは、戦争の凄惨さではなく、戦争の嘘であった。戦争の残虐さには耐えられても、戦争の嘘には耐えられなかったのだ。カーツからすれば、戦争とは掛け値なしの殺し合いであった。相手を殺すのは自分が殺されずに勝つためであった。戦争とは殺すか殺されるかのゲームにほかなかった。そのゲームの中に否応なしに放り込まれたのであれば、相手をためらわずに殺すことに徹するのが軍人としての役割であった。人を殺すのに嘘は必要なかった。カーツが米軍から離脱したのは、人を殺すことに耐えられなかったからではなく、人を殺すのに嘘をつくことに耐えられなかったからだ。戦闘ヘリでガンガン村民を殺しまくるキルゴア中佐が、カーツのように米軍を毛頭離脱する必要がなかったのは、戦争の嘘など気にも留めずに人を殺しまくることができたからだ。

立花隆がいうように、カーツはひたすら相手を殺すという戦争の本質の上に立っている。だが、それでは戦争は単なる殺し合いということになってしまう。カーツは、戦争は単なる殺し合いにすぎないという。しかし、近代以降の戦争はそれを認めるわけにはいかない。なぜなら、戦争が単なる殺し合いにすぎなくなってしまうなら、少なくとも近代以前の野蛮な戦争と全く変わりがなく、その戦争の中に自由・平等・独立・博愛等の理念を掲げて市民社会をつくりだしてきた人類の歴史の進歩が認められなくなるからだ。何のために誰のために、この戦争を行うのか。自由と正義のために、自由と正義を愛し守ろうとする人々のために、この戦争を行うのだという粉飾こそが、かろうじて近代以前の野蛮な戦争と区別するのである。どの戦争もこの粉飾を必要としているからこそ、カーツの考えを受け入れることはできないのだ。

《カーツに似ているのは、ビンラディンだけではない。ビンラディンを狩り立てるために、アフガニスタンに攻めこみ、原爆なみの広域破壊高性能爆弾「デージー・カッター」をアフガニスタン全土に落としまくり、人を殺しまくっているアメリカ軍の行動様式はカーツの行動様式とそっくりである。そういえば、湾岸戦争のアメリカ軍もそうだった。無慈悲かつ徹底的な武力の行使でことの結着をつけようとするのだ。アメリカがベトナム戦争の敗北から学んだことは、もっとカーツ的にふるまえということだったのではないか。》

この立花隆の指摘には、素直に首肯することはできない。アフガン爆撃に限らず、映画『地獄の黙示録』が舞台となったベトナム戦争時から、「人を殺しまくっているアメリカ軍の行動様式はカーツの行動様式とそっくりである」。アメリカが「無慈悲かつ徹底的な武力の行使でことの結着をつけようとするの」は、一貫していた。しかしながら、同じ「殺しまくり」であっても、アメリカ軍は嘘をつきながら殺しまくっていたのに対して、カーツの場合は嘘などつかずに殺しまくっていた。その点が、アメリカ軍の中で生みだされ、育ったカーツがアメリカ軍から離脱して、私兵を率いて自分の王国を築いていく方向へと決定的に分かったのだ。カーツ殺しを命じられたウィラード大尉がカーツに共感を示すのも、アメリカ軍が覆い尽くす戦争の嘘にやりきれなさを感じていたか

らだ。カーツの行動の特異性は、あらゆる虚飾を剥ぎ取って、戦争が単なる殺し合いにすぎないことをあからさまにした点にあった。

もともと「カーツ的にふるま」ってきた「アメリカがベトナム戦争の敗北から学んだことは」、味方が殺される人数をもっと減らして勝つためにはどうすればよいか、ということであった。ベトナム戦争のアメリカの敗北は何の成果も上げられずに撤退することになった点にあるだけでなく、アメリカ軍の戦死者が6万人近くに上った点にもあった（註 - 南北ベトナム人の犠牲者は200万人近かった）。要するに多数の味方の戦死者を出しながら、何の成果も上げられなかったのも、味方の戦死者をできるだけ少なくして、相手をたくさん殺した上で成果を上げることが、今後の至上命題となったのだ。地上から攻撃されることのないハイテク装備による空爆の方法が、それであった。このとき、戦争の本質は相手を殺すことから、いかに味方が殺されないようにするか、に取って代わったのである。しかも爆撃機への日常的なボタン操作の導入で戦争に参加しているという意識が遠のき、人を殺すことのためらいも薄らぐことになった。

嘘をつくと否とにかかわらず、人を殺しまくる点で「アメリカ軍の行動様式はカーツの行動様式とそっくりである」としても、アメリカ軍の行動様式にはその嘘の裏ではっきりとした国益が隠されていた。誰のために何のために戦うのかという問いに対して、アメリカは嘘を掲げるその裏でちゃんと国益を計算していた。ベトナム戦争の敗北の教訓は、国益を明確にせよという点にもあった。しかし、カーツの行動様式にはどのような私益が隠されていたのか。自らの王国を拡大することにあるのか。では王国を拡大して何になるのか。王国の拡大が彼のどんな目標に結びつくことになるのか。問いを次々に辿っていくと、カーツの行動様式には誰のために何のために戦うのかという問いに対する答えは用意されていなかった。戦場に身を置いている以上は、相手を殺すために戦わなくてはならないという論理が懸崖の尖端に剥きだされているだけであった。

コッポラはカーツについて、「この男は気が狂ってるんだよ。そして、こいつの狂気は、我々の狂気なんだよ」といっていることを、立花隆は最後に紹介している。殺すか殺されるかの行動様式しか通用しない戦場が、そんな行動様式とは無縁な日常生活からすれば、異常であるのは決まりきっている。戦争の異常な世界に放り込まれた者でも、やがて戦争が終焉すれば戦争とは無縁な日常生活へと還ってくる。そして平穏な日常生活の中で、戦争の悲惨さに遭遇してまともな神経を失いかけた自分を癒しながら生涯を過ごそうとする。しかしながら、その対極に戦争が終わっても日常生活へと還ってこない者がいた。いや、戦争というものを全身で受けとめてしまったために、戦争が終わった後の日常生活へと還ることができなくなってしまったのだ。カーツはそういう男の一人であった。戦争の嘘を嫌って戦争のない日常生活へ還ってくるのではなく、嘘が混じらない戦争を日常生活とする世界へと突き入り、抜け出せなくなってしまったのである。

カーツが自らの手で築き上げた王国とは、けっして終わりのない戦争を永続化する砦にほかならなかった。カーツが存在しつづけるかぎり、戦争は終わらなかった。かつてアメリカ軍の軍人であったカーツはアメリカ軍を離脱したとき、軍人であることをやめ

たのではなく、戦争そのものに従事する軍人へと自らを昇華せしめたのである。つまり、戦争が発生するから軍人が必要となってくるのではなく、軍人が存在するから戦争は発生しなければならなくなってくるのだ。カーツは戦争の本質のみならず、軍人の本質をも体現していたので、アメリカはその危険性を察知して、彼を抹殺しなければならなくなったのである。

ウィラードはそのようなカーツを殺し、そしてその武器を捨てた。カーツ王国は後継者を持たずに、崩壊することが映画では明らかにされた。もちろん、コッポラ監督の意図では、カーツ王国の崩壊が問題なのではなかった。崩壊すべきなのはあらゆるカーツ的論理であって、それ故にカーツ王国の崩壊がその王国の背後に巨大に聳えている、カーツ王国的なアメリカ軍そのものの崩壊を示唆しているのは明白であった。カーツ王国を無数に生みだす母胎にまでその崩壊が及ばなければ、映画はファンタジーにしかすぎなかった。したがって、カーツの首を切断するためにウィラードが振り下ろした斧は、カーツ的に振る舞っているアメリカ軍の首にまで届いていなければならなかった。

ウィラードのカーツ殺しは、カーツの考えに共感し始めていたウィラードの、命令を越えた温情主義的なものであると同時に、軍務の遂行という二面性を備えていた。確かにベトナム戦争の敗北からも明らかであったように、アメリカはもはやカーツ的な剥きだしの戦争のありかたではやっていけなくなっていた。アメリカ自身、自らのカーツ的な振る舞いを断罪せねばならなくなっていた。一人の、いや無数のカーツが跋扈<sup>はつこ</sup>せざるをえなくなるような余地を迫られていたのである。映画の中でウィラードがカーツを殺したように、現実のアメリカ軍も自らのカーツ的な振る舞いを殺した。もはや殺すか殺されるかの戦場でカーツ的な軍人の活躍の余地がなくなるような、もうそんな身の危険な戦場に立つことのないサラリーマン的な軍人が日々の職務を滞りなく遂行できるような、ハイテク戦争を確立していった。

ベトナム戦争時までのアメリカ軍の行動様式は、「地獄の黙示録」の戦場に身を置いていた。だから、カーツはそこから生みだされてきた。しかし、カーツ的な振る舞いを殺してきたベトナム戦争以降のハイテク戦争では、もはやアメリカ軍は「地獄の黙示録」的な戦場に身を置かないような戦闘の仕方を目指してきた。そこではしたがって、カーツ的な狂気も生みだされなくなった。もちろん、アメリカのハイテク戦争の行動様式は戦争の狂気を自らの陣営から無くしたわけではなかった。戦場を攻撃する側の目に映らなくしたように、単に狂気をみえなくしてしまったのだ。だが、カーツの狂気が目にみえている間はまだよかった。狂気の中に人間が映しだされているからだ。だから、コッポラがいうように、「こいつの狂気は、我々の狂気なんだよ」と狂気のつながりを確認することもできた。しかし、戦争の狂気は依然として渦巻いているのに、攻撃側の狂気かもはやみえなくなってしまうとき、むしろみえなくなった狂気がどのようなかたちで沈潜し、広まっていくのか、そのことのほうが本当に不気味になってきている。

2002年4月28日記